慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦前期「外交通」議員の出現 : 望月小太郎の生涯と活動
Sub Title	Appearance of M.P. acknowledged as an authority on diplomacy before World War II : life and activities of Kotaro Mochizuki, 1866-1927
Author	末木, 孝典(Sueki, Takanori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2019
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.92, No.7 (2019. 7) ,p.71- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20190728-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦前期「外交通」議員の出現

――望月小太郎の生涯と活動――

末木孝典

はじめに
第一章　生涯
第二章　活動
第三章　人物像
おわりに

はじめに

望月小太郎（一八六六―一九二七）は、明治三十年代から大正期にかけて活躍した舌鋒鋭い「外交通」衆議院議員である。慶應義塾に学び、英国留学で法廷弁護士の資格を取り、帰国後は「三大ハイカラ」[1]の一人として一世を風靡する寵児となった。若い頃から晩年まで伊藤博文や山県有朋、井上馨といった元老に重宝されたが、官界には背を向け続けた。

これまで『原敬日記』の酷評[2]が影響してか、望月は元老をはじめとする政界有力者に取り入る小物として扱われることが多かった。日露戦争後の対外硬派の一人として名前が挙がるが[3]、『新版日本外交史事典』（山川出版社、平成四年）にその名はなく[4]、人物伝を除き望月自身を主題とする研究も存在しない。

国立国会図書館憲政資料室蔵「望月小太郎関係文書」には望月の詳細なメモや書簡が含まれており、第二次大隈重信内閣成立に関する史料の多くは活字化された[5]。同史料により、望月が井上馨の私設秘書として同内閣成立のため元老間を奔走していたことが浮き彫りになった。季武嘉也氏は『大正期の政治構造』で望月を取り上げ、若い頃から山県、中井弘、中山寛六郎が期待し、手厚く支援した人物であること[6]、「国民主義的対外硬派」としての望月が大隈とも近く、元老の意を汲んだ形で尾崎行雄や大石正巳とともに加藤高明外相の孤立を狙ったことを示した[7]。近年の研究では、奈良岡聰智氏が『加藤高明と政党政治』において加藤との関係で望月を取り上げ、憲政会内で加藤と対立し、第二次大隈内閣や第一次加藤内閣において官職に就けず冷遇されたため、不満をもって幹部を批判する反主流派の一人として描いている[8]。

首相まで昇りつめた原と加藤がともに望月を嫌悪していたことは事実であるとしても、その視点で望月を描くばかりでは研究に客観性を損なうことになる。政治家同士の関係である以上、人間性以外の要因を探ることは必要だろう。本稿はこれまで研究の主題とされていない望月小太郎の生涯と活動を詳しく明らかにした上で、その人物像と活動の特徴を論じ、あわせて「外交通」議員が原や加藤に嫌悪された理由を考察したい。

第一章　生　涯

(1)　生い立ち

望月小太郎は、慶應元年十一月十五日（一八六六年一月一日）、甲斐国巨摩郡身延村（現山梨県南巨摩郡身延町）に父・望月善右衛門、母・もんの三男として生まれた。[9] 家は日蓮宗総本山の身延山久遠寺に近く、母は熱心な信者で、小太郎の出産時に日蓮に祈願して産んだと常々語っていた。五人の子どものうち、三人は夭折し、一人は幼子を遺して亡くなった。[10] 小太郎は身延学校を卒業した後、明治十三（一八八〇）年に父が死去したことで困窮したが、記憶力の良い小太郎に目をかけた山梨県学務課長の遠藤宗義や渡邊省三に助けられ、穴水朝次郎ら地元名士の支援により甲府の山梨学校（後の山梨師範学校）に入学することができた。[11] 学校外で廣瀬青村に漢学を学び、漢詩を作り始めた。困窮した状態は続いており、他人から借りた本を写して消灯後に廊下の灯りで勉強した。苦学の甲斐あって貸費生に選ばれ、十六年中学師範科を卒業した。同年十一月、山梨県南都留郡の瑞穂学校教員として勤務した後、兄・望月新が加波山事件に連座して逮捕されたため、[12] 小太郎は甲府の日蓮宗遠光寺で母と兄の妻子と同居し、極貧生活を送ることになった。兄のために代言人を探し、公判まで洋学を学ぶため母親を連れて上京し、十九年五月、南葛飾郡の細田小学校で六等訓導兼校長（月給八円）に就任する。[13] 兄は無罪となったが間もなく他界したため、[14] 遺子は小太郎が養った。

翌年三月、望月は学校統合により職を失い、[15] 一時袴田家に養子に入り（後に解消）、二十一（一八八八）年六月一日、慶應義塾に入学した。[16] 依然として困窮していた望月は学費を調達するため政治家グラッドストン[17]の伝記を翻訳していたが、途中病気で倒れ、同じ慶應で学ぶ永島今四郎の助けで二十二年九月に何とか出版することができた。[18] 同書は好評を博し、翌年六月再版された。望月の困窮を知った福澤諭吉は「金が無きこそ寧ろ志が立つの

である、大に努力せよ」と言って、望月に月八円の手当を出し『時事新報』に外国紙の記事を翻訳させた[19]。なお、この頃から望月は故郷の身延山久遠寺下の鶯谷に因んで鶯渓と号している[20]。

その後、望月は大学部が設立された慶應義塾に二十三年一月、改めて入学した[21]。四月には二冊目となる『議会法・一名議事学』を翻訳し、出版した。この頃ハーバード大学の貸費生募集を知り応募を考えたが、学費の半分を貸与される制度だったため残りをどう工面するか困り、末松謙澄に相談に行ったところ、中井弘を紹介された[22]。京都までの旅費は記事を書く約束で国民新聞社の徳富蘇峰に出してもらった。面会後、望月を気に入った中井は山県有朋首相に「前途多望」な若者なので「宜敷御庇護奉希望候」と推薦してくれた[23]。山県は米国ではなく英国への留学を勧め、年一千円の学費を二年の予定で出すことを約束した。出発前夜、福澤は望月を家に泊め、前途を心配し、海外に行って学問するならば、政治・法律ではなく、工業・機械を学ぶか通商貿易のような経済を修めよと忠告した[24]。

（2）英国留学と二度の随行

二十三（一八九〇）年六月十五日、神戸から乗船し英国に渡った望月は[25]、エジンバラ大学入学後、翌年十一月十九日、四大法学院の一つミドル・テンプル法学院に入学し法律を学び、二十七（一八九四）年六月六日、バリスター（Barrister at law）の資格を得た[26]。その間、ロンドン大学とキングス・カレッジで経済や歴史を学んでいる。ロンドンでは日本人留学生のコミュニティで南方熊楠や土宜法竜と宗教論を闘わせ[27]、大石正巳[28]や町田忠治[29]らと知り合った。二十四年四月十六日、雑誌“*Review of Reviews*”の編集者ステッド（William Thomas Stead）の紹介状と自らが翻訳した伝記のコピーを同封し、尊敬するグラッドストンに面会を求める手紙を送ったところ[30]、二十一日付の返信を受け取り、二十三日、念願かなって面会することができた。望月はマグフォード（Mugford）

を伴い、グラッドストンに直接、翻訳した伝記が日本で好評であることを伝えた。[31]

二十五年、日本では二月十五日投票の第二回衆議院議員選挙における政府の干渉が大きな騒動となっていた。[32]事態を憂慮した山県は、中井と側近の中山寛六郎を通じて留学中の望月に英国の選挙干渉史を論文として提出させ、その見返りに留学延長の許可を与える約束をした。八月一日、望月は長文の論考を完成させ提出した。[33]山県は「大ニ裨益を得」と評価し、[34]自ら序文を寄せ、『閑窓茶話』として出版させた。[35]中井は、先述の通り望月について「政治志操十分」と高く評価しており、[36]留学資金についても、「完全なる政事家の資格を備る丈之事は致呉度」と政治家になるまで支援することを決めていた。[37]血縁も地縁もない人物の処遇としては異例の待遇といえるだろう。

さて、英国での望月は、福澤の助言を生かし、二十六（一八九三）年三月から「工業、化学、鉄器」を扱う和文雑誌『日英実業雑誌』の発行も始めていた。[38]その後、雑誌発行で得た金を使い、[39]グランドツアー（大旅行）として欧州各国（仏、独、伊、墺、露）を歴訪した後、二十八年八月に帰国して政府に報告書を提出した。帰りに望月と同船した外務省関係者によれば、望月は英国人二人を伴い、日本で始める事業を周囲に吹聴していたという。[40]事業とは『日英実業雑誌』の発行を日本でも始めることであった。九月には留学中世話になった河瀬真孝（留学時の駐英公使）に旅行の報告をしたところ、伊藤博文に面会するよう勧められ、下旬に首相官邸を訪問した。[41]それから折に触れて伊藤に日露関係や貴族院改革などの意見を述べる関係を築いた。[42]帰国後は各団体から講演を依頼され、例えば十月二十六日には三田演説会に登壇し、「日本国ニ対スル諸外国ノ批評」と題して演説を行った。[43]新聞雑誌は競って記事を掲載するなど「一代の寵児」となり、[44]その行動、去就が常に注目される存在となった。山県は望月を川田小一郎日銀総裁の顧問に推薦し、望月は月に五、六百円の報酬を得た。官界への道を薦める声は後を絶たなかったが、望月は断り続けた。

二十九（一八九六）年、首相官邸に出入りしている中でロシア皇帝戴冠式に特使として山県を派遣する計画があることを聞いた望月は、伊藤に懇請し非公式な随行を取り付けた[45]。山県は陸奥宗光外務大臣に話を通し、望月が「雀躍」していることを伝え、礼を述べに行くので資金を出すよう働きかけた[46]。出発前に望月は福澤諭吉の自宅を訪れ挨拶した。福澤は「随分共御身御大切に被成度、夫のみ念じ入候」と体の弱い望月を気遣った[47]。また、佐佐木高行も出発前に「表面上は書生、其実は大使も及ばざる処の重荷負担」と望月の役割を認めて励ました[48]。

山県使節団は三月十五日に横浜から乗船した[49]。米国を経由して、四月二十六日にフランスに入り、途中ベルリンに一日滞在し、五月十六日にロシア王室が用意した特別列車に乗り、翌日モスクワに到着した[50]。戴冠式は二十六日に行われ、六月九日に山県・ロバノフ協定を結んだ。正式な随員ではない望月は横浜から米国までは使節団に同行したが、四月八日、ニューヨーク発の船で一行とは別に欧州に向かった[51]。渡航後、現地では山県に交渉の助言をしたことが伝わっている。それとは別に、望月は陸奥外相の紹介状を持ってソールズベリー英首相兼外相との交渉を試みたが、当時駐英公使だった加藤高明に止められ果たせなかった[52]。望月は別の手段でチェンバレン英植民相と会い山県に報告した。使節団は六月十日にモスクワを出発し、ドイツに寄り皇帝に謁見した後、七月二十八日に帰国した。望月は別行動をとり、帰途、同じく戴冠式に参列した朝比奈知泉（東京日日新聞記者）とともにバルカン半島、ルーマニア、ハンガリー、トルコ、ギリシャを視察し[53]、帰国後伊藤にバルカン情勢を報告した。視察中に知遇を得た在トルコの山田寅次郎は、望月について「大躍起政海に雄飛するとの事多分は議員位に出る事」と書いており[54]、望月が政治家への志を抱き、周囲に明言していたことがわかる。

また、三十（一八九七）年には、松本君平[55]とともに伊藤に随行し、英国のヴィクトリア女王即位六十周年記念式典に列席した。ただし、今回も望月と松本は正式な随行員ではなく、伊東巳代治は両名に対して、随行を周囲に吹聴することや同じホテルに宿泊することを禁じ、費用は井上馨と伊東が負担した[56]。このとき望月を気に入っ

た伊藤はイタリア公使への起用を検討するが、陸奥が反対したため実現しなかった。[57]

(3) 政治の世界へ

その後、慶應義塾の先輩尾崎行雄から政界入りを勧められ、[58]第六回総選挙（三十一年）に故郷山梨から進歩党候補として出馬するも落選を経験する。翌年仲間と『山梨民報』を買収し、[59]自らの政見を広く伝えながら、各地での遊説に励み、[60]山梨でも演説会を重ね選挙に備えた。三十三年、進歩党を除名された尾崎とともに立憲政友会に入った。そして、三十五（一九〇二）年、山梨の郡部選挙区（定数四）で三位に入り衆議院議員に初当選した（通算当選七回）。望月を支持したのは、日蓮宗関係者、葉煙草耕作組合、一部の県議であった。[61]選挙のたびに金が飛び交う山梨にあって、望月の選挙は「舌と脚との武器」を使った巡回演説が特徴であった。[62]

三十六年三月の第八回総選挙では二位で当選した。同年五月二十七日、望月は立憲政友会を離党すると、一時尾崎と別行動をとったが、その後立憲同志会、憲政会に所属した。三十七年の第九回総選挙では、山梨県下三新聞が他県新聞を引用する形で望月を「露探」（ロシアのスパイ）と見なし攻撃した。[63]望月は選挙妨害だと憤り、二月二十一日、三新聞を相手取って誹毀を理由として告訴した。ところが逆に望月自身が拘引され、取り調べを受けたため、前記三新聞は「露探」が逮捕原因と書きたてた。どうやら伊藤の揮毫を有権者に頼まれ渡したことが選挙法違反に問われたようだ。[64]この逆風下でも、「望月宗」、「鶯溪宗」[65]とまで呼ばれる堅固な支持基盤によって、望月は最下位ながら当選を果たした。三月十五日に選挙法違反の公判があり、十七日に罰金五十円に処せられたが、控訴し、五月二日、東京控訴院は無罪判決を下した。[66]その後、四十一年の第十回総選挙は次点で落選し、人物評論で知られる新聞記者鳥谷部春汀に「再選が望ましかった」と惜しまれた。[67]このとき、望月は鎌倉の松葉谷にある日蓮の法窟に入り祈願を籠めた。しかし、四十五年の第十一回は党内の候補調整の結果、望月は立候補す

ることができなかった。

大正三（一九一四）年、浪人中の望月は井上馨の私設秘書として不眠不休で元老と大隈重信の間を往復し、第二次大隈内閣樹立に奔走した。望月は以前から「デモクラシーとシビリゼーションの主義」をもつ大隈に共感し、私淑していた。[68] 同年十一月の補欠選挙に出馬する意欲をみせたが、同志会山梨支部内での候補選考は紛糾した。根津嘉一郎が選考委員による決定を判断し、選考委員は宇佐美一宝を選んだため望月は出馬を断念した。結局、補選では宇佐美が当選したが、不出馬の望月にも四百票を超える票が集まった。

そして、七年間の浪人生活を経て、大正四年の第十二回総選挙で三千票を超える得票で返り咲くと、六年、九年と三回連続のトップ当選を果たした。一般に外交は票にならないといわれるが、望月は豊富な海外情報をもとにした演説で地元のみならず広く大衆の支持を集めた。六年の選挙では、「与党候補者全体の敵」として望月を落選させるため、寺内正毅内閣の仲小路廉農商務大臣が指揮をとり、山脇春樹県知事に干渉を強要したが、知事は拒否して公平な姿勢で臨んだという。[69] 十三（一九二四）年の第十五回総選挙は小選挙区制で行われ、望月は堀内良平に二千票以上差をつけて当選した。この選挙では金権選挙が横行する中、憲政会が第一党となり、その後護憲三派で連立内閣を形成した。大正十五年、加藤の急死により若槻礼次郎内閣が成立すると、望月は十月に若槻首相を甲府に招き講演会を開催した後、ともに国内を遊説して回った。昭和二（一九二七）年三月二十日、望月は「明治節制定願意貫徹感謝大会」で明治節制定の請願紹介議員として「世界に於ける明治天皇」と題して講演を行った。[70]

なお、望月は記者として勤めた自由通信社内に国際部をつくり、新聞『日刊英文通信』、英文月刊誌『日本財政経済月報』の発行を始めた（詳細は次章）。落選で浪人中の明治四十二年四月、独立して英文通信社を設立し、日本の情報を海外に発信するとともに、海外の情報を日本に紹介した。東洋英和女学校出身で留学経験がある嘉

代子夫人も英語が堪能で、[71]『日刊英文通信』を病身の夫に代わり執筆することもあった。

(4) 死去

望月は気管支に持病があり、外国渡航中に発熱で苦しむことも少なくなかった。夏は避暑地軽井沢の別荘で静養したが、[72]事に当たって夜を徹してでも記事を執筆し、演説を準備し、書簡を発信し、必要であれば現地に駆けつける生活は望月の体力を奪っていった。

昭和二（一九二七）年四月、望月は浜口雄幸内相とともに赴いた熱海から移動し、地元山梨での補欠選挙応援中に病に倒れた。東京・原宿の自宅での療養中、井戸水から発生した腸チフスに罹り、咽喉結核を併発した。そして、五月十九日午前三時五分、議員在職中に死去した（六十一歳）。即日、衆議院書記官長から望月の特旨叙位が申請され、従五位に叙位された。[73]功績書は議員としての多年の功績を讃えた後、外交に関する著書や雑誌の刊行によって日本の国情を世界に紹介したこと、国際関係の親善に貢献したことを功績として挙げている。二十二日午後二時から青山斎場で告別式が営まれ、一千余名が参列したという。[74]熱心な日蓮宗信者であった望月の墓は、身延山久遠寺竹之坊境内にある。昭和十四年、墓所に功績を讃える記念碑が建立された。[75]

第二章　活動

(1) 衆議院議員

十六年余に及ぶ衆議院での活動は以下の通りである。明治三十八年の第二十一議会では、在韓邦人のための教育機関や農事水産試験場の設立を提案した。翌年の二十二議会ではポーツマス条約の用語不備を指摘し、国債整

理基金設立に賛成の演説をした。鉄道国有化法案の賛成派としても演説した。大正四年の三十六議会では日清・日露戦争の戦病死者遺族・負傷兵の救護を提案した。九年には政府の意図を明確にしないシベリア出兵を批判し、尼港事件における政府と軍の不一致を追及した。予算委員を長年務め、外交のみならず陸軍や海軍に関する議案審議に関わった。

議場では演説が巧みなことで知られ、明治四十年の時点で「氏の弁才と美音とは、今や之れを推重せざるを得ざる」、「口舌は即ち彼の生命なり」とまで言われ、「衆議院第一等の外交家」を自任していた[76]。また、議員からも「望月氏の美辞麗句と、ゼスチュアに至りては、稍々ハイカラな趣はありたるが、中々の雄弁なりき」と評価され、「鏡の前に立ちて身振り手振り面白く、何回も何回も練習を積みたりと聞く」と地道な努力が裏にあることが語られている[77]。

憲政会では大正十二年と十四年に総務として総裁を支え、十五年に顧問となった。「憲政会の私設外務大臣」[78]として議会では鋭い舌鋒で幾度となく政友会内閣の外交姿勢を批判した。その姿に大衆から人気が集まり、新聞上の読者投票では外相部門で加藤を抑え一位に名前が挙がった[79]。尾崎行雄らの熱心な推挙もあったが、第二次大隈内閣での外務省参政官就任は実現せず、第一次加藤内閣でも官職に就かなかった[80]。望月自身は「断じて猟官の運動も不仕将又射利の欲心も無之」と自分からは動かなかった[81]。対立政党であった政友会の望月圭介や野田卯太郎が外交通の望月を評価し、尾崎との関係を断って政友会に復帰することを熱心に働きかけたという話もある[82]。

（2）著述と翻訳

望月が生涯に執筆・編集した書物は、和文十一冊（うち翻訳書三冊）、英文八冊の合計十九冊であり、望月の演説を文字に起こした書物二冊を加えれば、二十一冊に及ぶ。十九冊の内容を分類すると、人物伝一、海外向け日

本の紹介六、国内向け海外論調の紹介五、調査結果四、政策提言三となる。多くは日本の実情を世界に知らせ、また、世界が日本をどのようにとらえているかを伝えるための書物であることがわかる。また、望月の名で掲載された新聞雑誌の記事は、これまでに確認できたもので百十三本に及ぶ。[83]

主な著書・翻訳書を紹介する。"Japan to-day"（現時の日本）は、明治四十二年の日英博覧会に合わせて日本を紹介する内容で、好評を博し、宮内省から下賜金を受けた。[84]四十四年二月には米国で売れていたホーマー・リー『無知の勇気』を『日米必戦論』（英文通信社）として翻訳した。[85]一説には四万部売れたという。[86]望月自身は米国で起きている「日米開戦説」に否定的であったが、[87]原書発行後米国の軍備増強の動きが活発になったことをふまえて日本への紹介を意図したものであった。[88]

代表作『世界に於ける明治天皇』は、世界各国の新聞雑誌に掲載された明治天皇関連記事を翻訳し、大正二年に和文版と英文版を出版した書物である。井上馨を通じて末松謙澄、金子堅太郎の校閲を得て、「閑院宮殿下に京都に於て拝謁を賜はり、同書を桃山御陵に献納」し、「天皇皇后両陛下及び各宮殿下に献上」し、一万部を内外に配ったという。[89]その後、十一年に縮小版『世界評論明治大帝と我国民性』を編集し、十五年に改訂版、昭和二年に改訂三版が発行されるベストセラーとなった。望月の死後も、昭和四十八年に原書房から明治百年史叢書として、平成十三年には明治神宮叢書として、それぞれ出版され読まれ続けている。信仰心篤い望月は、著作が成功するたびに日蓮ゆかりの鎌倉・松葉ヶ谷に灯篭を寄贈した。[90]

『独逸之現勢』（英文通信社、大正二年）は、ドイツの政治、経済、文化などを幅広く紹介する千頁を超える大著である。文学の記事もあるが、専門外である望月は、英文通信社員を通じて森鷗外に原稿を依頼した。[91]鷗外の日記によると、明治四十五（一九一二）年六月二十四日に望月の使いとして服部活民が、十一月二十八日には別の社員村上猶太郎がそれぞれ鷗外を訪問し、「現時の独逸」の編集に関して説明した。十二月十一日にはさらに

井箆節三が訪れた。ここで原稿を依頼したとみえ、二十日に鷗外は「独の文学」という草稿を井箆に手渡した。翌日、井箆は礼を述べに訪問している。須田喜代次氏は、このときの鷗外の草稿が『独逸之現勢』中の「文学」にあたると推定している。[92] ただし、鷗外の名は執筆者として記されてはおらず、あくまでも著者望月による執筆という形になっている。その点については、英文通信社員との三度に及ぶ打ち合わせの内容がわからないため、望月が専門外の独文学について教えを請い、鷗外が快諾して下原稿となる文章を提供した可能性が高いことを指摘しておきたい。

大正十年の『軍備制限と日米関係』（日本評論社）は、ワシントン会議出発前に日本がとるべき姿勢について書かれた書物である。望月は、確認できるだけで、大隈重信、徳富蘇峰、斎藤実、都築馨六、元田肇に同書を贈呈あるいは書簡で紹介している。

（3） 新聞雑誌発行と通信社経営

先に述べた通り、望月は自由通信社に国際部を設立し、英文の新聞雑誌を発行していた。明治四十二年に英文通信社として独立し、四月八日に帝国ホテルで創業披露パーティーを開催した。徳富蘇峰（国民新聞）や大岡育造（中央新聞）、池辺三山（東京朝日新聞）、ブリンクリー（Japan Mail）、J・R・ケネディ（U. S. Associated Press）ら国内外の主要新聞社、通信社から五十人が招待された。[93] 特に、親交厚い徳富とは雑誌発行について頻繁に情報を交換し、相談していた。同社は四十二年六月から印刷事業も開始した。望月は通信社社長として海外通信社記者との懇親会を主催するなど内外に知られた。[94] その後、小太郎が多忙となったため、甥の清矣（精矣）が社長を引き継いだ。その頃の評判では「報道の的確と迅速を以て知られ雑誌の所論公正にして共に読者の信用を厚ふす」と評価され、編集営業の社員十八人を雇っていた。[95]

望月が発行した新聞雑誌は、新聞『日刊英文通信』と雑誌『日英実業雑誌』、『日本財政経済月報』（*The Japan Financial and Economic Monthly*）、『商工之天下』の四紙誌である。[96] 以下、順番に取り上げたい。

『日刊英文通信』（一九〇六―一九三〇？）は、英文通信社の広告で一日に数回発行されたことが謳われているが、国内外の各機関を探しても完全な形での所蔵は現在のところ確認できない。部分的に残っている「阪谷芳郎文書」中の記事をみると、タイトルは、*THE EIBUN-TSUSHIN*となっており、文字はタイプで打たれた形の簡易的な体裁となっている。[97] 新聞というよりもニュースレターという方がふさわしいだろう。望月は斎藤実に英文通信を国内外に発送していることを伝え、「通覧」を薦めている。[98] 望月の死後も毎日一回ないしは三回発行していることが昭和五年までは確認できる。[99]

『日英実業雑誌』（一八九三―一九一九）は、明治二十六年、留学中の望月が英国で発刊した和文雑誌である。[100] 創刊号は英国人主筆ボーマンの文章を望月が翻訳する形だったが、記事よりも広告の分量が圧倒的に多く、英国企業から広告の出稿を獲得していたことがわかる。[101] 二号からは自ら主筆となり、英国において日本語の活字を組むことに苦労を重ねたため、眼病、脳病により病院で療養しながら記事を書いた。[102] 徐々に各国の産業の現状を統計とともに紹介する記事が増え、雑誌は日英両国で大評判となった。二十八年からは前述の通り、帰国時に連れてきた英国人社員を東京に駐在させ、東洋出版会社（イースタン・プレス）と名付けた。この頃には発行部数は五千部に到達していた。[103] 大正八年の一〇六号までの発行が確認できる。

『日本財政経済月報』（一九〇七―一九三〇）は、日本の経済・財政の統計や評論を世界に発信することを目的に明治四十年七月に発刊し、最盛期には世界に二十万人の読者がいることを誇っていた月刊誌である。[104] 昭和五（一九三〇）年十二月までの発行が確認できる。価格は一冊六十銭、一年購読六円で始まったが、大正九（一九二〇）年六月号から一冊一円、半年購読六円、一年購読十二円に変更された。第一号はタイプで打っただけの簡易

的な体裁であったが、第二号からはタイトルに装飾を施し多彩な記事を特集する紙面構成に変わった。分量は、初期は一〇〇頁を超えたが、その後は七〇頁程度に落ち着いた。確認できる範囲では大正二年まで望月が編集人として記載され、毎月の外交問題を論じる記事が巻頭を飾ったが、徐々に望月色が薄れていき、時折議会質問を紹介する程度になっていく。途中、明治四十四（一九一一）年九月号から翌年十一月号まで本誌記事を抜粋和訳した付録「日本財政経済月報（和文）」がつけられた。趣旨として四十三年に欧米を巡遊した望月が自社の事業拡張の必要を感じ、国際通信部を設置して海外の有力な新聞雑誌と通信を開始したことを契機として、海外の商工経済の現状を日本人に伝えたいと考えたことによる企画であった。[105]

その後、望月は「老境に入り、十分な活動ができない」ことを理由に、大正十一（一九二二）年、東洋経済新報社（以下、新報社）の石橋湛山のもとへ、石橋の中学の同級生であった早川徳次（姪・詞母子の夫）を仲介役として送り、同誌を引き受けてくれるよう依頼した。[106] 同社も英文雑誌発行に興味をもっており、具体的な検討に入った。同年六月八日、編集は新報社、販売は英文通信社が行うが、編集会と協議会を毎月一回開き方針を決めること、両会のメンバーは望月、甥の清矣、早川、石橋、三浦銕太郎の五名とすることで合意に至った。しかし、半年で欠損金が二千円を超える赤字経営となり、翌年三月号で新報社は共同経営から降りることになった。ただし、同社にとっても英文雑誌編集の経験は、一九三四年発刊の“*The Orient Economist*”に生かされたと評価されている。[107]

『商工之天下』は、明治四十二（一九〇九）年五月に発刊された雑誌であり、確認できるのは同年十月発行の第五号までである。[108] 外国人の日本観を国内に知らせる目的で同誌を発行した。[109] 編集部員八人、邦人記者・外国人記者、社外客員数十人の体制で、実地調査を行い、学者の意見を聞き評論を依頼した。一冊十八銭で刊行されたが、四号から十五銭、五号は十一銭と徐々に価格を下げている。内容は外国新聞雑誌の日本に関係する評論記事

の翻訳、国内著名人による評論、東京案内、経済情報など総合雑誌の趣がある。短期間で終刊したのは、同誌発行の翌年に先述の欧米訪問と国際通信部の設置があり、その翌年から「日本財政経済月報（和文）」添付が開始されていることから、別立ての同誌を発行しなくても読者の多い既存の雑誌に和文付録を添付することで当初の目的を達することができると判断したのではないかと思われる。

（4）外国訪問

望月は、日本の対外関係改善のため自ら外国に赴くことも度々であった。訪れた国は、既に述べた二度の随行以降では、明治三十六（一九〇三）年に露国、中国、三十八年に再び中国、四十一年に米国、四十三年に欧米、四十四年に米国、大正五（一九一六）年に中国、六年に米国、八年にも米国（英国渡航予定だったが病気で帰国）、十年に米国（ワシントン会議参加）、十四（一九二五）年に中国（関税会議参加）である。

中国情勢には深く介入していたようで、大正五年六月、中国訪問中に要人と会談した内容を日本政府に報告し[110]、日本が中国情勢に主導的立場を取るよう自説を主張し、七月には唐紹儀に日本が協力する旨の手紙を送り、資金百万円の調達を請け合っている[111]。

八年の訪米は、カリフォルニア州での日本人移民排斥運動が日本でも問題になる中、日米親善のための衆議院議員視察団によるものであった。政尾藤吉が団長を務め、望月も団員として参加した。視察団は九月から十二月まで各地を巡り、百回以上の講演を行ったという[112]。十年のワシントン会議には渋沢栄一ら実業団一行とともに渡米した。望月は海軍軍縮の比率を批判して反対意見を日本政府、米大統領に伝え、米国有力紙もその主張を掲載した。これらの精力的な外国訪問と親善の努力をみれば、望月を単なる対外硬論者と位置づけることはできないだろう。

第三章　人物像

（1）望月の行動様式と人生観

世間の誤解の多くは、望月の英国流価値観にもとづく行動様式への無理解と違和感に由来すると思われる。以下では、主に留学時の経験を語った雑誌記事を紹介することで、望月の行動様式と人生観を知る材料としたい。[113]

英国人は簡単には人を紹介しないが、英国留学の経験上、紹介するとなれば必ず十分な世話をしてくれる。紹介状を持参すれば有名人とも会える。「ハイカラ」といわれることについて、日本では修飾とか虚飾というが、英国では自己を尊敬し、他人への尊敬を欠かさない態度作法である。[114] 英国人の価値観は第一に勇気、第二に独立、第三に正直である。勇気とは己を偲ぶこと、弱者をいじめぬこと、不意打ちをしないことを意味している。独立とは生活上だけでなく思想上の独立を意味しており、年長者と年少者の間で争論が起きて決着がつかなければ、最後は意見が違うことに同意すると言って別れる。各自が信じるところを自在に述べ意見がない者を見下げる。正直とは知らぬことは知らぬと言い、約束は必ず励行し、不正直とは最も厭うべき屈辱であるという観念を持っている。また、同じ雑誌の別の特集で青年の進路について問われた望月は、近頃の青年の「退嬰主義」、「引込み思案」を嘆き、将来は中国と朝鮮にあると断言する。[115] 国内で会社の社長となっても「酒とか、女とか道楽とか唯豚の如き贅沢を為し、豚の如き死に了つて仕舞ふ」し、大臣になっても「辞めると僅かの間に名前も忘れられる」という。

以上の英国経験からは、望月が紹介状の重要性を知った上で実践していたこと、「ハイカラ」な服装は自己や他人への尊敬を欠かさないためであったこと、弱者をいじめない勇気・思想上の独立・約束を守る正直を価値観として身につけていたことがわかる。青年に対する助言からは、望月の人生観が出世主義を否定し、自らの運命

を海外に託す開拓精神に価値を置いていたことがわかる。

(2) 批判と評価

英国留学から帰国した望月は世の注目を集め、「望小太（もちこた）」と呼ばれ、「ハイカラ」議員といわれた。当時の風潮として「或る事に熱心な人とかいふものを冷かす風があッて、実に善くない癖だが渾名をつけて呼ぶ」というから、[116]「望小太」も親しみだけでなく冷やかしの意味がある。洋装で身を固め、弁舌巧みで、どこにでも押しの強い物腰で入っていき、著名人との交流を包み隠さず語る望月は、「パイヲニアー」[117]として新鮮さをもって受け止められるとともに、嫉妬や顰蹙を買ったことは想像に難くない。[118]望月自身も世間から誤解され、「不法の攻撃」まで受けることがあったと認識し、原因を自らの修養不足と意志薄弱ととらえ、鍛錬のため「日蓮聖人の伝記」を読むことにしたという。[119]

特に、外務省に関係する人物からは警戒されていた。加藤高明は、外務省以外の人物による外交を警戒し、明治二十九年のロシア皇帝戴冠式への山県特使派遣について「何等ノ為メニ有之候哉」、「不審ニ堪エサル次第」と不満をもち、随行する望月についても「愚物ノ飛上リ者」で、「有名家ニ面会ヲ求メ得意カル一癖」があると陸奥宗光外相に報告し、「稲垣満次郎ニ劣ルコト数等其言行窃ニ在欧日本人中ノ笑者」と酷評した。[120]一方、望月は加藤の外交官としての素質を高く評価した。[121]望月の見るところ、駐英公使時代の加藤は「才気煥発」で「理屈屋」であったが、憲政会総裁として「政党の風塵に修行」した結果、「風彩（ママ）は温厚となり才気は之を内に抱擁（ママ）して外に発露せざるまで大成」したという。[122]実際に、加藤は望月から政友会などの政界情報を得たり、[123]望月の内田康哉外相への議会質問に我が意を得たりと感激して涙した。[124]望月も加藤と尾崎行雄の関係を改善させようと党内の融和に努めたし、[125]加藤も望月や尾崎らの軽井沢の別荘に「友達同様」に遊びに行ったのである。[126]総裁と総務と

して政党をともに支える二人の関係は改善されていた。

また、陸奥に見いだされ官界に進み、政友会を率いて首相となった原敬は、望月が元老に政友会の悪口を吹き込み、虚言を弄して欺いていると認識していた。望月の人格についても、大隈から手当金を受け取りながら井上馨に付いているという話を聞いて「望月の人格にては何とも保証しがたし」ととらえ、望月の生活に余裕があるという話を聞いて「私利を計り居る」と決めつけた[127]。さらに、清浦内閣で外相を務めた外交官松井慶四郎も、「望月という男はエライ者で、井上侯に取入って加藤さんから敬遠されていたが、後には加藤さんが民政党の総裁になると、またまたうまく摺込んでスッカリ同邸に出入りするようになった」と書いている[128]。党の総裁である加藤邸に総務である望月が出入りすることは何ら不審なことではないが、松井の言葉にも望月に対する軽侮の念が感じられる。

以上の通り、加藤や原、松井といった外務省関係者が、元老と親密で国民外交として独自の動きをみせる外交通の望月を信用していないことは明らかである。ただし、彼らが望月を嫌っていたのであって望月が嫌ったのではない。また、若い頃の嫌悪感がベテラン政治家になってからもそのまま続くとは限らない。

逆に望月を評価した人々もいる。既に述べた通り、幼少期には地元名士が支援し、また、前途を嘱望した中井弘と山県有朋によって英国留学が実現した。福澤も塾生であった望月を支援し、「随分才あり」と高く評価していた[129]。盟友尾崎行雄も「或る種類、又は或る方面の働きに於ては、同君は他人の企て及ばざる手腕」と述べ、大隈内閣成立時の望月の働きを評価した[130]。宗教家田中智学は望月を「廉潔な一種の風格人」、「真面目過ぎた人」と評し、望月の政治姿勢として「至誠を以て一貫するといふやり方」と表現した[131]。地元の支持者も「血を民衆政治に流して終始一貫した」、「現時の日本が有する特色ある一俊才」と讃えた[132]。死後、望月を「不遇」と評する声が出た。その根拠は、周囲から一等国の公使への起用の話や外務大臣への期待の声が出ながらも結局無冠に終わっ

たことにあるだろう。しかし、「一代の寵児」の頃から元老に目をかけられ、望めば官界への足がかりはいくらでもあった望月本人が官職を望んでいたとは思えない。

おわりに

以上、望月小太郎の生涯と幅広い活動によって果たした役割について述べてきた。

望月の生涯は、議会政治の発展と国民外交の実現に自らの信念をかけた人生であったといえる。選挙では金権選挙で知られる山梨にあって、国際情勢と日本の外交を演説して回り強固な地盤を築いた。英国留学によって、勇気、思想上の独立、正直、自己と他者への敬意を重視する英国流価値観に強い影響を受け、紹介状を持って有名人に会いに行く積極性を身につけた。そして、出世主義を排して開拓精神と独立心旺盛な生き方を実践した。その努力と才能を評価する人々の後押しによって世に出ると、活動の舞台は議会にとどまらず、独立して新聞雑誌を自ら創刊した言論の世界や、パイオニアとして新たに開拓した国民外交の世界に広がっていった。国境を超えた独自の情報網からの迅速な情報収集と新聞雑誌を通じた国内外への的確な情報発信、そして外交の現場に飛び込む行動力は他に類例を見ない。新たに出現した「外交通」議員兼ジャーナリストゆえに、世間からの誤解や政治家からの嫉妬、軽侮を招いたと考えられる。また、日本外交の列強追随を批判する辛辣で鋭い議会演説から対外硬論者と規定されてきた。しかし、望月は自ら何度も外国を訪問し、日本との関係改善を働きかけた国際親善論者でもあった。官職を求めていたとする見方もあるが、それは国民外交論者である望月の信念に反しており、本人は猟官運動を一切していない。したがって、周囲が期待し、あるいは推挙したことによる誤解である。

望月が原敬と加藤高明から嫌悪されていたことについては、陸奥宗光に評価され出世した外務省経験者という

二人に共通する点が重要である。陸奥もまた望月の駐伊公使起用に反対し、実現させなかった。三人が外務省による外交一元化を理想としたのに対して、望月は外交における政府監視を明言し、議場で鋭く迫り、海外要人と独自に会談した。周囲は「私設外務大臣」とまで呼んだ。すなわち、陸奥や原、加藤と独自の路線を貫く望月との対立は、外務省外交（「旧外交」）と国民外交（「新外交」）との対立という側面をもっていたのである。[133] 三人の徹底した望月排除は人間関係上の対立だけでなく、独自の情報網とそれにもとづく国民外交への強い警戒感を考慮に入れなければ理解できない。ただし、若い頃は望月を蔑視していた加藤も、晩年に憲政会総裁になると老練な政治家同士の共闘関係を築いた。若い頃の嫌悪感や確執は事実としても、政治家の関係性は立場や局面で変わり得ることに注意を向ける必要がある。

なお、紙幅の都合により、望月の外交論の内容については稿を改めて論じる予定である。

（1） 望月、竹越与三郎、松本君平を指す（「近世ハイカラ列伝」『実業之日本』第二九巻、第一号、大正十五年一月、六〇頁）。

（2） 原奎一郎編『原敬日記』第四巻（福村出版、昭和四十年、四五—四八頁）。

（3） 宮地正人『日露戦後政治史の研究——帝国主義形成期の都市と農村』（東京大学出版会、昭和四十八年、三二三・三二五—三二六・三四二頁）。酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会、昭和五十三年、二三二・二四八頁）。寺本康俊『日露戦争以後の日本外交——パワー・ポリティクスの中の満韓問題』（信山社出版、平成十一年、三二五—三二六頁）。

（4） 拙稿「望月小太郎（福澤諭吉をめぐる人々二二）」『三田評論』第一二二〇号、平成三十年三月、六〇—六三頁。野村英一『三田の政官界人列伝』（慶應義塾大学出版会、平成十八年、一六六—一七〇頁）。なお、野村氏の著書には、望月を袴田作兵衛の三男とし、その後望月喜左衛門の養子となったとする重大な誤りや、第十一回総選挙で落選したとする誤り（実際は不出馬）、留学を明治二十五年からとする誤りがある。

（5）山本四郎編『第二次大隈内閣関係史料』（京都女子大学、昭和五十四年）。また、望月が大隈内閣期に経済界の支持を取り付けるために渋沢栄一らと接触していたことを取り上げた研究として、玉井清『原敬と立憲政友会』（慶應義塾大学出版会、平成十一年、六三―六四頁）がある。

（6）季武嘉也『大正期の政治構造』（吉川弘文館、平成十年、一五五―一五六頁）。

（7）同前書、一三六・一四一―一四二頁。

（8）奈良岡聰智『加藤高明と政党政治』（山川出版社、平成十八年）。奈良岡氏は、望月の雅号「鶯渓」を「世に出ず不遇の地位にいることのたとえ」（二〇〇頁）と根拠なく決めつけ不遇を強調する。また、「何ら官職を得られず、党運営に不満だったようである」（四〇五頁）との推測にもとづき、「党運営から疎外されていることに不満を持つ」望月が、「対米・対中強硬論で幹部の突き上げを図った」（三七七頁）と強調しているが、官職が得られず党運営に不満だったことの根拠も示されていない。全体として加藤が憲政会で巧みに主導権を握るまでの経緯を描く上で、党内不満分子・急進論者として望月を位置づけている感がある。奈良岡氏の記述が成り立つためには、望月が官職を欲し、党内で主導権を握りたがっていた人物であることの証明が必要である。果たして望月がそのような人物であったのか、本稿で検討したい。

（9）望月の生い立ちについては、『郷土史にかがやく人々』第一〇集（青少年のための山梨県民会議、昭和五十三年、二五―四七頁）、町田是正『身延山秘話外史』（延寿坊、平成二年、一二一―一三九頁）が詳しい。

（10）望月自身が「四人の同胞」と述べている（望月小太郎「日蓮大聖人の国家本位的宗教」『天鼓』第七巻、第一号、大正四年、一四頁）。

（11）「望月小太郎氏の談話（一）―（五）」『山梨日日新聞』明治三十年十二月一日―五日、七日付）。以下、留学からの帰国までの経緯は特に断りのない限り、望月が自ら語った同記事による。なお、本来（六）であるはずの七日付記事が（五）となっている。

（12）止水生「鶯渓望月小太郎君を憶ふ」『民政』第七巻、第六号、昭和二年六月、五五頁。山田毅一「噫鶯渓望月先生（一）」『山梨民報』昭和二年五月二十五日付。加波山事件で逃亡し山梨潜伏中に逮捕され死刑となった保多駒吉の追悼式が明治四十四年十二月に甲府の善光寺で行われた際、望月は墓前で祭詞を詠んでいる（前掲『郷土史にかがや

く人々』三五頁）。このことから、保多をかくまった容疑で兄が逮捕された可能性がある。

(13) 「明治十九年進退録六」（東京都公文書館蔵）、「明治十九年進退原議」（同前）。同小学校は、前任者の授業が保護者から不評だったため後任を探していた。

(14) 山田毅一「噫鶯渓望月先生（二）」『山梨民報』昭和二年五月二十六日付。

(15) 「明治二十年進退原議冊ノ五」（東京都公文書館蔵）。

(16) 慶應義塾福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』第三巻（慶應義塾、昭和六十一年、五三五頁）。袴田小太郎として入塾し、証人は京橋区新富町の袴田伊兵衛（後に削除）。

(17) 日本におけるグラッドストンの伝記の系譜については、杉原四郎「グラッドストンと永井柳太郎」（同編『近代日本とイギリス思想』日本経済評論社、平成七年、二三六—二六七頁）参照。

(18) 望月小太郎、永島今四郎訳『第十九世紀政海ノ泰斗グラッドストン公伝』（集成社、博聞社、明治二十二年、自序六—八頁）。望月は同書ですでに鶯渓生を名乗っている。

(19) 望月小太郎「水を飲むの注意と水を飲むの心得」（三田商業研究会編『福翁訓話』実業之世界社、明治四十二年、三二三頁）。

(20) 本人が「雅号の由来」（『時事新報』大正二年十一月十七日付）で日蓮と久遠寺に由来すると明言している。したがって、号の由来を「不遇」とする奈良岡説は誤りである（前掲『加藤高明と政党政治』一八六・二〇〇頁）。

(21) 前掲『慶應義塾入社帳』第五巻、三二三頁。このときの入社帳では望月姓に戻り、証人は浅草区の望月観解、本籍は身延村で望月謹弥方となっている。

(22) 誰の紹介で中井の知遇を得たのかという点について、文献によって福澤と末松に分かれる。ここでは、前掲「鶯渓望月小太郎君を憶ふ」に依拠し、末松説を採用した。

(23) 年月不詳五日付山県有朋宛中井弘書簡（尚友倶楽部山縣有朋関係文書編纂委員会編『山県有朋関係文書』第三巻、山川出版社、平成二十年、二二頁）。

(24) 前掲『福翁訓話』三二四—三二五頁。

(25) 六月十三日付中井弘宛望月小太郎書簡「中井弘関係文書」（早稲田大学中央図書館貴重室蔵）。

(26) *Registers of Admissions to the Honourable Society of the Middle Temple*, Volume 2, 1782 to 1909, Middle Temple, p. 687 (http://archive.middletemple.org.uk/Shared%20Documents/MTAR/MTAR%20-1782-1909.pdf 最終閲覧日：二〇一九年五月十五日)。望月の肩書はジャーナリストで、エジンバラ大学と慶應義塾大学の学生として入学している。

(27) 「ロンドン日記」一八九三年十一月二日条（『南方熊楠全集』別巻二、平凡社、昭和五十年、二三頁）。明治二十七年二月五日付土宜法竜宛南方熊楠書簡、明治二十八年月日未詳南方熊楠宛土宜法竜書簡（『南方熊楠土宜法竜往復書簡』八坂書房、平成二年、一二七・二三七頁）。

(28) 大石正巳（一八五五―一九三五）は、土佐出身、自由党幹部を経て後藤象二郎の側近として活躍し、衆議院議員（当選六回）、農商務大臣となる。

(29) 町田忠治（一八六三―一九四六）は、秋田出身、新聞記者を経て『東洋経済新報』を創刊し、日本銀行を経て衆議院議員（当選十回）、農林大臣、商工大臣、大蔵大臣を歴任した。

(30) Add MS 44512 Gladstone Papers, Kotaro Mochizuki 1891, f.225, British Library.

(31) H.C.G. Matthew ed. *The Gladstone Diaries*, vol. 12, Oxford University Press, 1994, p. 381. 君塚直隆「解題――神川信彦『グラッドストン』を読む」（神川信彦『グラッドストン――政治における使命感』吉田書店、平成二十三年、四六〇頁）。なお、君塚氏は二人が会った日を二十一日としているが、実際に会ったのは二十三日である。

(32) 拙著『選挙干渉と立憲政治』（慶應義塾大学出版会、平成三十年）参照。なお、同書に中山が選挙後に高知などに派遣され、干渉の実態調査を行ったことを紹介した。

(33) 望月小太郎「下院議員選挙ニ関スル英国政府干渉ノ顚末并ニ之ガ私見ヲ附シテ日本ノ同問題ニ及ブ」（八月一日付書簡、前掲「中井弘関係文書」）。書簡には書き直しや校正の跡が残っている。同題名の冊子が「都筑馨六関係文書」（国立国会図書館憲政資料室蔵）に含まれているが、こちらは書き直しや校正の跡もなく、出版されたものと同文である。

(34) 九月二十九日付山県有朋書簡（前掲「中井弘関係文書」）。

(35) 『閑窓茶話――鶯渓生其知友に寄せたる書簡』（金谷充、明治二十五年）。翌年、『選挙干渉論――閑窓茶話』と改

題し再出版された。なお、両書とも鶯渓生と記され、望月の氏名の記載はない。

(36) 前掲、年月不詳五日付山県有朋宛中井弘書簡。

(37) 前掲『大正期の政治構造』一五五―一五六頁。同書が引用している明治二十五年九月十六日付中山寛六郎宛中井弘書簡による。

(38) 和田桂子「日本人雑誌編集者の見たロンドン」（和田博文他『言語都市・ロンドン――一八六一―一九四五』藤原書店、平成二十一年、六一五―六一八頁）は、望月の経歴とともに、『日英実業雑誌』の創刊から隆盛までを紹介しており、大変参考になった。

(39) 徳富蘇峰は、望月が留学帰りにロンドン銀行の通帳を持ち帰り、雑誌で成功しある程度の財を成したと述べている（『読売新聞』明治四十二年四月十日付）。

(40) 明治二十八年八月三日付原敬宛能勢辰五郎書簡（原敬関係文書研究会編『原敬関係文書』第二巻・書簡編二、日本放送出版協会、昭和五十九年、五八一頁）。帰国の時期は望月小太郎「日本商工業ノ前途」（『日英実業雑誌』第三巻、第一二号、二二頁）による。

(41) 望月小太郎「伊公に知音の十五年」『太陽』第一五巻、第一五号、明治四十二年十一月十日、二二九―二三九頁。以下、伊藤との関係については同資料による。

(42) 金子堅太郎によれば、伊藤は意図的に自説と逆の立場で話し同意する者を「浅薄」として遠ざけ、反対に自説を主張する「学あり、才あり、気骨あるもの」を評価した（林田亀太郎『明治大正政界側面史』大日本雄弁会、大正十五年、一二五頁）。望月も恐らく頑固に自説を主張したと推測されるが、後に紅葉館での演説で伊藤を激怒させ疎遠になった。

(43) 『三田演説会資料』（慶應義塾福澤研究センター、平成三年、一七五頁）。その後、明治三十二年十二月九日に「東西歴史の研究」と題して演説したほか、三十三年一月二十七日には懸賞演説会の審判員を務めた（同前書、一八一頁）。

(44) 「新立志編（二一）・一代の名声家望月小太郎氏（八）」『読売新聞』明治四十一年四月二十七日付。同連載は四月二十日から三十日まで望月の半生を取り上げ、人物像を客観的に観察し、その長所・短所を描いている。

(45) 前掲「伊公に知音の十五年」二三一頁。
(46) 〔明治二十九年〕二月二十六日付陸奥宗光宛山県有朋書簡「陸奥宗光関係文書」(国立国会図書館憲政資料室蔵)。
(47) 明治二十九年三月十日付望月小太郎宛福澤諭吉書簡(慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』第八巻、岩波書店、平成十四年、一六七頁)。
(48) 三月十三日付望月小太郎宛佐佐木高行書簡「望月小太郎関係文書」(国立国会図書館憲政資料室蔵)。
(49) 『東京朝日新聞』明治二十八年四月十八日付。
(50) 山県一行の旅程については、長岡新治郎「山県有朋の露国派遣と日露協定」『日本歴史』第五九号、昭和二十八年四月、一六—一八頁、参照。一行の詳細な行動内容については、前掲「都筑馨六文書」中の「山県有朋外遊関係」参照。
(51) 「山縣有朋欧米随行日記第一」三月二十八日条(前掲「都筑馨六文書」R23)。
(52) 望月小太郎「正を踏で懼れざる故伯」『憲政公論』加藤前総裁追悼号、大正十五年三月、四九頁(文献資料刊行会『復刻憲政公論』第五巻、柏書房、昭和六十三年所収)。
(53) デュンダル・メルトハン、三沢伸生「イスタンブルの中村商店をめぐる人間関係の事例研究——徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎の書簡を中心に」『東洋大学社会学部紀要』第四六巻、第二号、平成二十一年三月、一八五—一八六頁。朝比奈知泉『老記者の思ひ出』(中央公論社、昭和十三年、一三五頁以下)。
(54) 明治二十九年十二月二十九日付徳富蘇峰宛山田寅次郎書簡(前掲「イスタンブルの中村商店をめぐる人間関係の事例研究」二一五頁)。
(55) 松本君平(一八七〇—一九四四)は、静岡出身で米国留学後、『大日本』を発刊し、東京政治学校を創立し、衆議院議員(政友会、当選五回)となる。
(56) 五月二十四日付伊藤博文宛伊東巳代治書簡(伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』第二巻、塙書房、昭和四十九年、三五九—三六〇頁)。伊東によると、費用は井上が三千円、伊東が一千円を負担したという(安在邦夫、望月雅士編『佐佐木高行日記——かざしの桜』(北泉社、平成十五年、三六五頁)。
(57) 前掲『佐佐木高行日記』三六五頁。明治三十二年五月、下田歌子が望月と密通しているとの風聞を水面下で佐佐

木が調査していた。伊東巳代治からの聞き取りにより、望月帰国直後は望月と伊藤博文の関係は良好だったが、その後不和になり、伊藤が望月の醜聞を流したとわかった。伊東の説明の中で幻の駐伊公使起用の話が出た。

(58) 明治三十一年六月十四日付望月小太郎宛尾崎行雄書簡（前掲「望月小太郎関係文書」）。

(59) 「緊急社告」『山梨民報』明治三十二年三月一日付。同二十六日付、二十八日付付録に各界著名人からの祝電が紹介された。望月は二十六日付社説で紙面改革について述べた。以後、望月の論説を中心に東京からの情報が増える。

(60) 『東京朝日新聞』明治三十二年一月五日付・同八日付・同二十二日付。進歩党遊説員として七日から大石正己と武富時敏とともに出発し、大阪、静岡を回った。同四月五日付によると、埼玉の増租反対大会での演説は壮士の妨害によって中止となった。

(61) 有泉貞夫『明治政治史の基礎過程――地方政治状況史論』（吉川弘文館、昭和五十五年、三〇九頁）。

(62) 『東京朝日新聞』明治三十七年一月十一日付。

(63) 『東京朝日新聞』明治三十七年二月十七日付。

(64) 『山梨民報』明治三十七年三月一日付。

(65) 鮎川克己『新甲州及新甲州人』（鮎川克己、昭和六年、七七頁）。

(66) 『東京朝日新聞』明治三十七年三月一日付・同十六日付・同十八日付・五月三日付。

(67) 鳥谷部春汀『春汀全集』第三巻（博文館、明治四十二年、一三二頁）。

(68) 明治三十年十一月八日付・明治三十一年十一月九日付大隈重信宛望月小太郎書簡（早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第一〇巻、みすず書房、平成二十六年、一八六・一八九頁）。

(69) 前掲『新甲州及新甲州人』七二頁。

(70) 『望月小太郎氏最後の大演説』（天業民報社、昭和二年、非売品、諸言一頁）。

(71) 旧姓新美。明治三十年に望月と結婚し、大正四年に娘（義子）が生まれる。女学校の同級生に作家片山廣子（翻訳家松村みね子）がいる。互いの結婚後も軽井沢の別荘が近く行き来があった。

(72) 明治四十五年に購入した別荘で、広い敷地内には貸家も建てており、室生犀星は年二百円払って借りていた（室生朝子『父犀星と軽井沢』毎日新聞社、昭和六十二年、一六―二六頁）。娘・義子によれば、望月は軽井沢で尾崎行

雄や加藤高明、福原俊丸、後藤新平、殷汝耕ら政治家や外国の外交官と会談していた（望月義子『青き木漏日』ながらみ書房、平成六年、九―一九頁）。

(73) 「叙勲裁可書」昭和二年、叙位、巻一六（国立公文書館蔵）。

(74) 『東京朝日新聞』昭和二年五月二十三日付。

(75) 現在、碑文は長年の風雨により解読困難であるが、望月清矣編『鶯渓遺稿』（春光社、昭和十七年、非売品）に全文が掲載されている。なお、同書は版によって掲載写真に一部異同がある。

(76) 前掲『春汀全集』第三巻、一二三―一二四頁。

(77) 関直彦『七十七年の回顧』（三省堂、昭和八年、二四五頁）。

(78) 無腸公子「吾党丑年の代議士」『憲政公論』第五巻、第一号、大正十四年一月、三九頁。

(79) 『読売新聞』大正十三年六月二日付。なお、加藤は首相部門で一位になった。憲政会機関誌『憲政公論』（第一巻、第五号）上の人気投票でも、望月は外相部門で幣原喜重郎（百四十四票）に次ぐ二位（百三十二票）に入り、政務官部門（第一巻、第九号）では外務省参政官に当選している。

(80) 前掲『加藤高明と政党政治』一四七頁。

(81) 大正三年十月二十日付大隈重信宛望月小太郎書簡（前掲『大隈重信関係文書』第一〇巻、一九五頁）。

(82) 前掲『新甲州及新甲州人』一〇七頁。

(83) 新聞への談話は除く。多くは外交や国際情勢に関する報告、論評、提案である。掲載媒体としては『太陽』二十三本が最も多い。

(84) 同書は現在、宮内公文書館に二冊所蔵され、ハーバード大学、スタンフォード大学など諸外国の大学図書館にも所蔵されている。

(85) 同書は昭和五十七年に原書房から再刊された。

(86) 渋沢雅英『太平洋にかける橋――渋沢栄一の生涯』（読売新聞社、昭和四十五年、二三九頁）。

(87) 望月小太郎「国際通報事務局設置の理由」（原敬関係文書研究会編『原敬関係文書』第九巻、書類篇六、日本放送出版協会、昭和六十三年、五七一―五七八頁）。同じ冊子が「斎藤実関係文書」書類の部三四―七（国立国会図書

館憲政資料室蔵）にも含まれている。

(88) 「例言」『日米必戦論』（英文通信社、明治四十三年、一頁）。

(89) 望月小太郎縮訳『世界評論明治大帝と我国民性』（英文通信社、大正十一年、二頁）。

(90) 前掲「日蓮大聖人の国家本位的宗教」一六頁。

(91) 森林太郎『鷗外全集』第三五巻（岩波書店、昭和五十年、五六一・五七六・五七七頁）。

(92) 須田喜代次「独の文学を草して井篋節三に交付す――『鷗外日記』一九一二年一二月二〇日の記述をめぐって」『大妻国文』第三八号、平成十九年、一七五―一九二頁。なお、同論文には『独逸之現勢』中の「文学」が所収されている。

(93) *The Japan Financial and Economic Monthly*, vol. 3, no. 22, April, 1909.

(94) 大正十年十二月九日の懇親会には海外通信社記者二十名以上が集い、望月は「何等日本政府ノ走狗」ではないことを述べ、訪米中に大統領に面会した際に日米親善を切望すると繰り返し言われた話を披露した（「望月小太郎主催外国通信員招待に於ける概況」「会議事務ニ関スル諸規定其他」陸軍省・華府会議・T10―3―64、防衛省防衛研究所蔵、アジア歴史資料センター）。

(95) 「望月清矣」『新聞人名辞典』第一巻（日本図書センター、昭和六十三年、四九七頁、底本は永代静雄編『昭和新聞名家録』新聞研究所、昭和五年）。

(96) 先行研究では、蛯原八郎『海外邦字新聞雑誌史』（学而書院、昭和十一年、五八―六五頁）が『日英実業雑誌』を「欧州に於ける邦字雑誌の最初のもの」として紹介し、第一号の「本紙発行ノ主意」を全文引用している。また、同『日本欧字新聞雑誌史』（大誠堂、昭和九年、一八九頁）は、『日本財政経済月報』を簡単に紹介している。

(97) *THE EIBUN-TSUSHIN*　一九一〇年十一月十八日号、「外国新聞雑誌所蔵阪谷芳郎評伝」（「阪谷芳郎文書」R79、国立国会図書館憲政資料室蔵）。手書きで「英文通信十一月十八日、第2種郵便物認可」、「Second Issues Interview」と記載されている。

(98) 明治三十九年九月七日付斎藤実宛望月小太郎書簡（前掲「斎藤実関係文書」）。

(99) 前掲「望月清矣」『新聞人名辞典』四九七頁。

(100) 所蔵する号が最も多いのは大英図書館であり、国内では国立国会図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫が初期の号を比較的多く所蔵している。
(101) 横山源之助「我国広告業の発達及び現状」(立花雄一編『横山源之助全集』第五巻、法政大学出版局、平成十六年、九六—九七頁)は、英国の広告を取っている雑誌の例として『日英実業雑誌』を挙げている。
(102) 『日英実業雑誌』第一巻、第二号、明治二十六年六月。
(103) 前掲『言語都市・ロンドン』六一七頁。
(104) 所蔵する号が多いのは大英図書館であり、国内では早稲田大学図書館、慶應義塾大学図書館、国立国会図書館、小樽商科大学などが比較的多く所蔵している。
(105) 「英文『日本財政経済月報』に邦文添付の趣旨」*The Japan Financial and Economic Monthly*, vol. 5, no. 9, Sep., 1911.
(106) 東洋経済新報社百年史刊行委員会編『東洋経済新報社百年史』(東洋経済新報社、平成八年、一七八—一八〇頁)。石橋湛山『湛山回想』(岩波文庫、昭和六十年、三二三—三二四頁)。以後の共同経営に関する記述は両書を参照した。石橋は望月日謙に育てられた時期があり、日謙と親しい小太郎を昔から知っていた。
(107) 前掲『東洋経済新報社百年史』一八〇頁。
(108) 管見の限り、所蔵は東京大学明治新聞雑誌文庫のみである。
(109) 明治四十二年五月二十二日付徳富蘇峰宛望月小太郎書簡(徳富蘇峰記念館蔵)。
(110) 「支那政見雑纂」二(外務省外交史料館蔵)。
(111) 「各国内政関係雑纂・支那ノ部」八(同前)。
(112) 香川孝三「政尾藤吉伝(四)——法律分野での国際協力の先駆者」『国際協力論集』第九巻、第三号、平成十四年二月、三九頁。
(113) 「海外渡航の心得」『青年界』第二巻、第一二号、明治三十六年十月、二四—三〇頁。
(114) 当時の英国における価値基準としてリスペクタビリティ(respectability)が該当する(井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』昭和堂、平成八年、一三七頁)。

(115) 「青年将来の進路」『青年界』第三巻、第一号、明治三十七年一月、一九―二四頁。
(116) 田中智学『師士王全集』第三巻、第一〇（師士王文庫、昭和十一年、三〇一頁）。
(117) 細井肇『現代日本の政治家』（國光社、大正五年、三四五頁）。
(118) 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』（実業之世界社、明治四十二年、九一五頁）。同書は、望月の議会演説を「気取家（ママ）の八百長演説」と冷笑する人がいるが、望月ほど外交や国際事情に詳しい議員は他にいないと述べ、「一種嫉妬的悪罵」と指摘している。
(119) 前掲「日蓮大聖人の国家本位的宗教」一五頁。
(120) 〔明治二十九年〕四月十六日付陸奥宗光宛加藤高明書簡（前掲「陸奥宗光関係文書」）。
(121) 望月小太郎「内田、加藤其他の遣外使臣」『中央公論』第二六巻、第五号、明治四十三年五月一日、九七頁。望月は「今の滞外外交官中では先づ第一に加藤を推す、頭脳明晰、特に根が商人上りだから何事も計算に明か」と述べている。
(122) 前掲「正を踏で懼れざる故伯」四九頁。
(123) 大正六年一月二十日付・同二十二日付・同二十八日付加藤高明宛望月小太郎書簡（前掲「望月小太郎関係文書」）。
(124) 憲政会幹部談「望月君を悼む」『山梨日日新聞』昭和二年五月二十日付。
(125) 大正三年四月十二日付加藤高明宛望月小太郎書簡（前掲「望月小太郎関係文書」）。
(126) 前掲「正を踏で懼れざる故伯」五〇頁。
(127) 前掲『原敬日記』第四巻、四五―四八頁。望月によれば、大隈からの手当は再三断ったが最後は井上の承諾を得て受け取ることにしたというから、原が認識しているような二枚舌や裏切り行為ではなかった（大正三年十月二十日付大隈重信宛望月小太郎書簡、前掲『大隈重信関係文書』第一〇巻、一九五頁）。
(128) 松井明編『松井慶四郎自叙伝』（刊行社、昭和五十八年、八三頁）。
(129) 明治二十三年六月十一日付清岡邦之助宛福澤諭吉書簡（前掲『福澤諭吉書簡集』第六巻、三〇〇頁）。
(130) 尾崎咢堂全集編纂委員会編『尾崎咢堂全集』第七巻（公論社、昭和三十年、五四八頁）。
(131) 前掲『師士王全集』第三巻、第一〇、三〇一・三〇五頁。

(132) 前掲『新甲州及新甲州人』九八頁。

(133) 旧外交と新外交の定義については、千葉功『旧外交の形成――日本外交一九〇〇～一九一九年』(勁草書房、平成二十年、はしがきii頁および注8)参照。